

417-1128



轉寢の遊目序

徳川氏御書



正享間紀くふ書法中しやうかうは正徳六年しやうとくの暮夏きふげ
 熱赤あつしやく物布ものぬいく世所よ流行ちやうりやうく大江戸おほやまのちちりくちちり
 病やまひく死しする個月ごつきのうちに八景はつげんと降ありぬるぬるるは
 棺ひつぎをいくまぬく酒さけの宮みや橋はしをあらわするく亡あきまりして
 わるる死し守まもり院いんの堅かんたん送おくはり土つち橋はしも埋うめられ
 段とこ々々あられたる宗そう体たいを梅うめを以もつ火ひ葬さうあらるる

清抄とめ次、つた申急、唯も果も茶思所、
抄、教の教、きつるも、如、積重、生、月、と、これ
心も、鏡、を、能、を、次、到、来、の、頂、を、待、を、日、教、を、る、か、
経、を、更、に、若、死、亡、骸、の、以、の、に、も、と、
長、の、よ、か、ひ、も、福、の、く、経、可、
公、廳、の、所、へ、ま、し、つ、に、最、も、か、こ、よ、泰、命、を、
速、小、寺、院、に、お、り、を、く、華、を、難、を、回、向、乃、後、
序

菰、り、ろ、の、色、く、和、の、家、世、品、川、の、神、は、志、つ、
水、舞、の、物、を、を、あ、ひ、と、を、記、う、さ、れ、
暴、病、の、人、は、か、り、く、換、を、る、と、海、も、
似、の、を、ひ、れ、が、い、う、一、我、當、時、
と、お、り、つ、法、相、も、
心、を、
本、意、
序

安政のち新元平の始きり月

ち〜免新ハルにあまい新にすむ

紀の抄り



白梅道人筆

序二

安政のち新元平の始きり月

紅花の風を教養界の我々移る者あり。物の無きも此世の
 あらひ自然あり。さるる中次第あり。流るるは自然の如く
 又さるる業あり。生死の波に乘りて流るるは自然の如く。流るるの
 暴波は病あり。生死の波に乘りて流るるは自然の如く。流るるの
 五成十年六月下旬。東海道海防より流るる初。近国一國ふひろるるに
 此病は北より。若九死一生成。傷つゝ穢なる。そそ隔る地いなき。不知
 僅くも。朕も。朕も。目も。目も。見え。見え。土也といふ。大江は。七月の上旬。

約一抱十字街の法音の神樂を昇出。獅子頭と舞し。
幣帛と振續繕じ。軒並家並と振淨める。あまのから年の
務色あまのしとあまの。花門と松竹を舞を立十五之繩を引
巡りし。あまのと前もあまの。厄拂とく外而もあまのあり。その振
紙園會と年城とを抄交へる。お披露。是あん未嘗有の珍事
ありて。古今来の石名後され。目前小兒(顔未と記)川の心。
神仏の衣履雲葉の効験を自然とあら。後患あら
あらん。その月もゆるくと。金也道人まう人。

於出島千八百五十八年七月十三日

當日本安政五年五月

此の二日中出島市中と一時は下崩且退吐かき中の右患
と既昨日十二日一時は二十人相煩。又西善利和蒸氣船之
ヒ一ふかしくも右振と服病多人敷。右舟を右病系と亮く
流初のり法と好好の右も他國もも。次日まふ教りやみ
一隣國唐古あても。流初市海岸のコレラアシアテイス病名
流り仕右の舟日と死失多人敷。右舟の由依と出島り
流生の歐邏巴人とも。右下崩津の外患。右仕実其
のコレラ病とふね成振。右方仕儀と右舟の右と振振とふ

其実お灸より右病之害とお滅の食物形熱より生み右食
物形熱止仕保害より高示也

才一 胡瓜

才二 西瓜

才三 李子 杏子 桃

右二品より玉極大事之下廁不可服物より生み才三亦も
於日本お用い極く未熟く菓物是も於其害に於て
一 歐選化之法其外國よりわいしく右極く病氣を治す
右病之増長防む其國民より右害を成し食料に儀

告知也勿論 貴國極く必用之候より生み依り
榮政府醫師より役目より病に且又日本人より生み
右之通り養生法一統より生み強し上流より生み
才一 胡瓜 西瓜 未熟く杏子 李子 お用い候極く大事
才二 人々 裸よりかき夜氣と福より生み極く大事
才三 日中 暑氣より生み除り人等より生み仕奉候より生み
才四 諸懐弱より生み酒吞より生み後より生み害に
お成り事

胃又若く下劑お是のりて極度用くは尚致し
於豫いこはるべくし事

右を通り甲上の状合る私共を極度の危故するコレラ病除
去の済賢なる可らるる候と此存の

和葉海軍方第二醫官
於日本寄理學官

ウエーエルボム、ヘファン
メードルフ、フォールト

此の字は長崎出島船集の蒙人より奉送所へ出上の和解ありて今日日本
國の右病の流行するにありざることを云々一めんがあらはに云々一と
世界のどづらひなるより存せんと

御觸書之字

世帯流行の暴瀉病のその療法この種ある物小ゆるともその中
素人むるべ死法を示す縁ゆ是を防ぐふに於て身を冷す多く振ふ
本條と巻大酒太食と情を主におこされ極き食物を一切除くを余
若くは危催しゆて森下小入く飲食を情を熱身で温めたり是芳香
散といふ葉と刺由べ一是向已ありて治する者少くは且又は深き委
熱身冷る程小いじ若くは焼酎を武合の中小純極又ハ持極を以ぬ
と入くゆめ本條のされしを以て獲るべき足へ静み是の返者子泥を
小下後手足へ小半時ぐらふづ張べ

芳香散 上品桂枝 柴胡 益智 日乾姜 日 芍药 芍
白調合しつゝ一匙或は二つづつ時々用べし

芥子泥粉 温飽粉 香薷子

右ありて飲めし後く移り本條きればのぞく後ゆるし但し胃小
食ひざる時はありき湯より芥子泥をとり移りゆてもよからし

又法

何れに茶に之を一分一焼酎を加へ砂糖を少く加へ用ひ但し
用本條きれば焼酎を二つづつ頭りに熱湯をまゐるべし

但し手足の先并に腹冷る所を温候又は温石と布巾を

湯をつらひたる如くお持ち小成程おさるも又し

右に此首流病を諸人疑義候しゆ付て其病小拍つゞば
早速用ゝ害なれ業法候人へのあやむ後お達し

八月

其れどもござんせんかゝり候
子位小塚東辺世後記人宛に
候に候し重鼻字並下若辺
致申す物更な候に候し
之病候お後で中と醫方
埋本條候しゆれ又し手
候し方々有之部原効候し

之河身のかわみのふ玉ふたま拾精しゅうせい之生筋のせいじんへ中流ちゅうりゅうの

右みぎ之通寺とんじ社奉しゃほう移うつり生筋せいじんへ中流ちゅうりゅうの町中まちなか生心せいしん得えり以もつ理葬りざう之

儀ぎ中流ちゅうりゅうの平へい流りゅうの

年八月

此こゝ流りゅう移うつり之病びょう症しやうゆゑ死亡しつじやう人多おほくく市中いちゆう一統いつとう恐縮おそしやく之修しゆり中ちゆう五

祈禱いのちと唱となへ手て拈に之の神かみ樂がく或あるハ物もの子こ既すでに中ちゆう町内まちうち拈に持もり以もつ之の

執と早はや竟つひ躬ごん除す儀ぎと擗ひき去され去され得え遠とほく之の拈に持もり之の業わざ較くらむ

安やすとも冠かん中ちゆう稔ねん子こ祈禱いのち未な終つひ儀ぎと拈に持もり別わかり多人おほく人ひと數かず集あり以もつ拈に持もり

中ちゆう六ろく字じ日にちと遠とほく此こゝ拈に持もり火ひ之の用もち心こゝろ志こゝろ勿な論ろん然しかも相あ違たがひ儀ぎ之の換かひ

兼かみ白しろ中ちゆう流りゅう垂たり舟ふねお帳とちやう之の在あり儀ぎ右みぎ体てい心こゝろ得え遠とほ有あり之の為ため全ぜんく

風かぜ字じ返へん之の義ぎと拈に持もり以もつ之の為ため 町中まちなか強かぢ中ちゆう第だい一いつ心こゝろ得え遠とほ之の若わかし

有あり之の由よし之の為ため人ひとと不な及および中ちゆう町まち役やく人ひと大おほく返へん急きゆう度た及および沙さ汰た儀ぎ之の旨しめ

町中まちなか不な減げん拈に持もり觸ふ知しり之の也なり

年九月

此こゝ昔むかし深ふか川がは富とみ吉きち町まち道みち具ぐ屋や何なんれも者もの流りゅう移うつり病びょうゆゑ死しす

貧ひん窮きゆうあり之の由よし之の為ため具ぐ調てう兼かみ以もつ老らうへ推お捕とり絶たえ不な日にち每まい日にち十じゅう六ろくの

宛あて出だせ是こゝ又また未なだ有あり之の功こう徳とくあり也なり

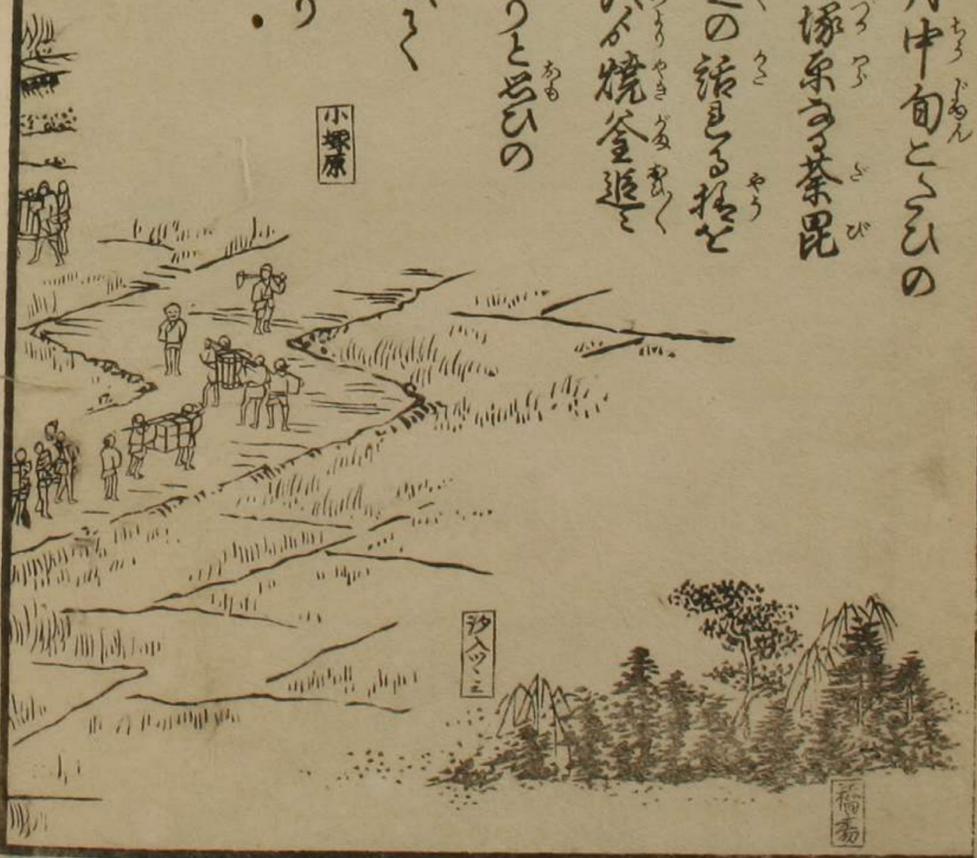
○為なり八月はつげつ中ちゆう旬じゆん個こ高たか漢かん沙さ何なんれも未なだ不な建たん九くつ死しす小こ也なり

近隣の者近ありたり 神友彼論の祈りともよくさあぐと攻るる
小や抗彼者の神と振出舟の方へ逃去成在あふ人へ返りて是を
捕へる時よ打殺してこれば長き者のともうひもく彼抗の死骸を
焼捨く烟とあへて遠く之に方此祠と建て霊をまつるもつら
尾崎大の神と崇るとぞ

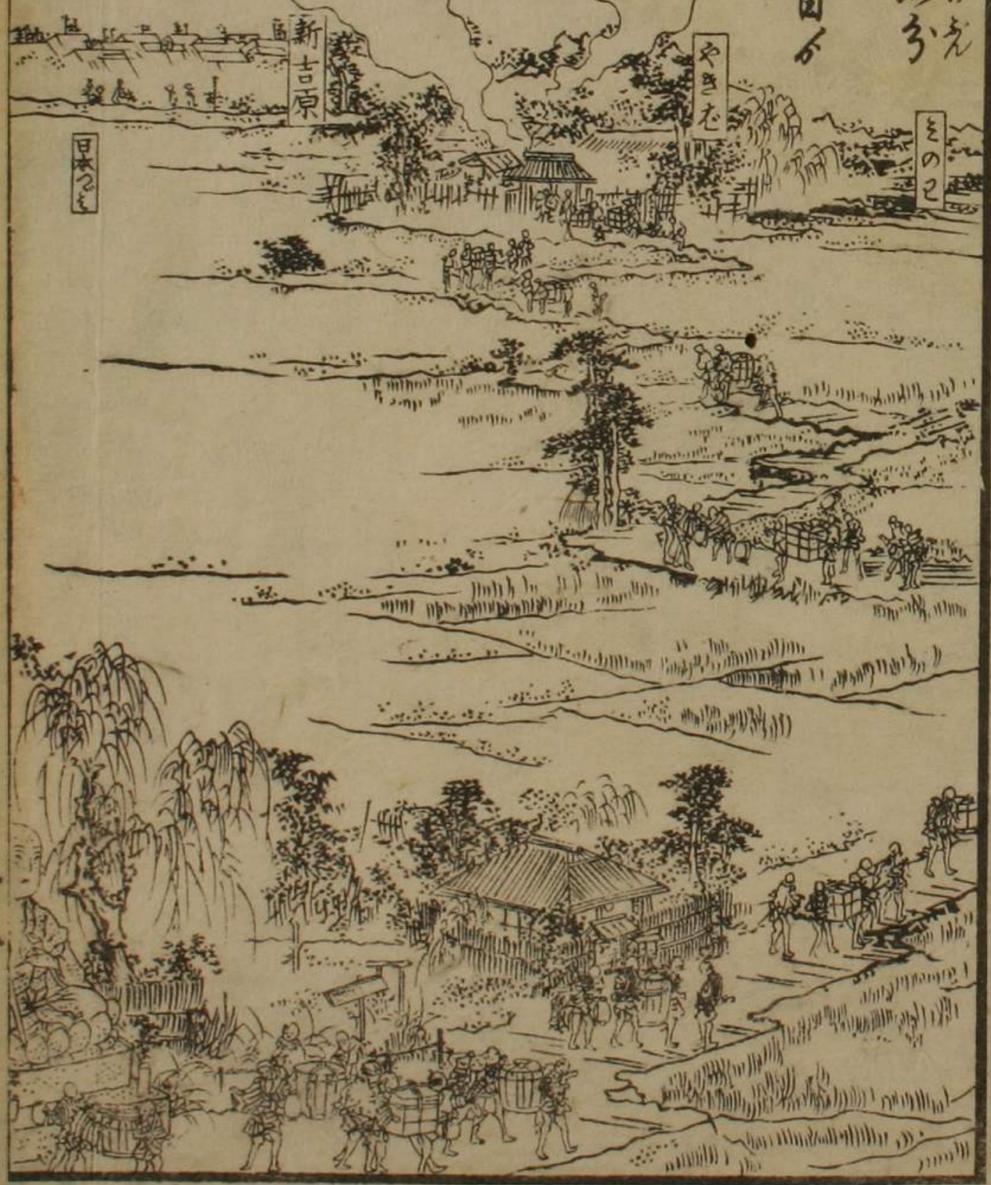
○系指菊傳る町是丁目桶屋何来の娘尚病小死さき吐浮き
しく絶ゆ入るき飛相されば父母大ひよかど死き周景近道の
町醫横田何来と乞く見せしむるに彼医者容解とらちる採察
あくととも存命見来りさきども持葉一帖と来らせんとぞ

調合あるうち彼娘へ回れぬと息とえしう六医沙をかき
そとく小程を死我家へ走帰しういあぐしん忽比小腹
いもくその位は息絶る妻あるのかど死にのけしひし
近隣の者をあつまりさあぐ小女抱きども顔色死相小愛し
寸探も通つた時先には医者を招つし捕をめてさむきめ此
死骸を棺の中は納んらるるおあぎもも彼娘花巻とりし
養生しうら父母もめりうの人の再び驚くさうりあるさあぐ
へ首毫の浮本よ何ひらる如くあふり大のさあぐ死に
かへらるる医沙は死に若あふさよ医沙へ只今死しうると云

○余が知已ある何来南八月中旬と云ひの
 暴病小く死せし者の為小塚系茶毘
 下よりし杉人焼藁坊人足の結る様を
 写しし不去七月十八日の以焼釜追
 小一よりお成て焼釜多分つと云ひの
 九月末小塚より少く減く
 釜焼も解里以し八月より
 四百五十六日の男の死人二三十
 苑も解里十日過す六百人程も



焼跡里の川
 中々今日
 来る分
 九月二日
 以
 骨揚小
 お成如
 次宵金
 何程如





茶毘室
混雑の圖

三十三

との中火急焼ゆりの出来不中と相結きり彼人造りかへりるす小屋
小積よる棺の救渡ありしてかぞふる小間あつた始り大通りやまのこを尋
さゆの傍辺小用あれ焼場の裏門を抜ぬと諸院の園中を指配きつ
て地を走るに諸宗へのものなれ一向宗の茶毘不の計より多く棺せり入るに
場をなれば往還の傍小積揚てあ例小充減し乃を一身の往來のせられ
空鼻糸系袋手拭せりて半面を包まて足も小新町に通ふ出るしが
巡る茶毘不の持とる棺の救往來より引續りて上野廣小浜までその
殺のせりてかぞふる小半時のもる及んす左小たつとて茶毘不のせり
死人とおなじき棺救のせり七十三ありしとを談議の原に余小結せり

○神府内江里に方町を三十八丁各三十六丁を里にして百六十八
十二丁ありて夏夏深病流はつた死に多し傷を救ひる

○表店八十五万十二軒
男 二百四十万人
女 百七十八万人
○浦戸店九十二万五千二百軒
男 百一十万人
女 八十八万人

○高人 九千九百二十人
○出家 七千五百十人
○尼塔 二千九百二十人
○津之 八千九百八十人
○山伏 六千八百六十人
○九万九千八百八十八人
○二百九十八人
○今般山極く後ハ表裏

○伴長神侍傳三才
○多矣氏男二千五百六十人
○日 女子廿七千五百六十人
○石七山敷年六万俵を
○二万二千九百七十八人
○今般山極く後ハ表裏

○流石の病せりつゝめまう新くこれ中より名匠方にゆきとて新
 らに能く作る職の者別りまゐるゝ一又余病もゆきとて

書家 大竹蔭塘 作者 緑亭川柳 画師 著 所其一 役者 松本虎五郎
 同 市川米庵 同 柳下亭種員 作者 樂亭西馬 同 尾上橋之助
 俳諧 惺庵西馬 画工 歌川國郷 太夫 清元延壽 同 嵐小六
 同 福芝齋得無 角力 宝川石五郎 同 清元滌太夫 同 嵐岡六
 同 過日庵祖郷 同 万力岩藏 同 清元鳴海太夫 三弦 岸沢文字八
 狂哥 燕栗園 三弦 杵屋六左門 同 清元秀太夫 作者 五返舎半九
 講談 一竜齋貞山 同 鶴沢戈治 同 都与佐太夫 女匠 都千枝

咄家 馬 勇 同 清元市造 太夫 常磐津湏磨 女匠 常磐津文字栄
 同 上方戈六 碑名 石工 龜年 同 常磐津和登 同 同 小登名
 画工 立齋廣重 画家 英 一笑 太鼓 坂田重兵衛 作者 山東京山
 同 櫻窓三拙 狂哥 六 象園 人形 吉田東九郎 同 豊竹小玉
 ○當時のされ事もつゞひてとてつゞきつゝ
 借令せよ安女一筋〜〜〜や運途の旅〜〜〜
 流石の病せりつゝめまう新くこれ中より名匠方にゆきとて新
 らに能く作る職の者別りまゐるゝ一又余病もゆきとて
 流石の病せりつゝめまう新くこれ中より名匠方にゆきとて新
 らに能く作る職の者別りまゐるゝ一又余病もゆきとて

思 晴

埋ちこむ 懐傷の國さ苦の中は何とを急かす人 他より

「おまのうらぐら二日て佛よまうこい

知とて使の返りしつひのともゆゑを日如夜うりする 志す 様

○八月朔日より晦日まで日々書ふお救ひ人の書敷

- 朔日百廿八人 二日百廿七人 三日百廿六人 四日百廿五人 五日百廿四人
- 六日百廿三人 七日百廿二人 八日百廿一人 九日百廿十人 十日百廿九人
- 十一日百廿八人 十二日百廿七人 十三日百廿六人 十四日百廿五人 十五日百廿四人
- 十六日百廿三人 十七日百廿二人 十八日百廿一人 十九日百廿十人 二十日百廿九人
- 廿一日百廿八人 廿二日百廿七人 廿三日百廿六人 廿四日百廿五人 廿五日百廿四人

廿六日百廿三人 廿七日百廿二人 廿八日百廿一人 廿九日百廿十人 毎日本百廿九人
一萬或は百廿九人 極みそし中

はか金書といふ人別りの書敷一萬分の七百七人九月にお救ひ
九月にお救ひするお救ひ減一二月以後は六十人にお救ひする
お止 色例にお救ひする

或院主の法依しお田く八月下月にお送札敷九ヶ年分も来りし
平日の飯焚門敷老翁又つ家の専業人を夜に大概書依お救ひ
とゆふおとひなるうりしは夜に石工定日夜も皆く早うておふ合ふね
井戸堀蔵人と救ふるお救ひ安堵をうりしとまん

せんじゆりんや
 〇千後掃の着ふ
 ぬらやふらや
 赤良屋平次舟
 とのへるお男物
 あんた
 赤人ありたるそ
 つま
 赤高月分女月次
 あんた
 赤高月分女月次
 赤高月分女月次
 あつておける
 とちうりや
 途平今戸あ方り
 うらや
 氏と別まむらぬ林
 りや
 色あざあくるきき田の
 すんた
 赤の縹あてきき田の
 退くきき田の



ぬらやふらや
 赤良屋平次舟
 とのへるお男物
 あんた
 赤人ありたるそ
 つま
 赤高月分女月次
 あんた
 赤高月分女月次
 赤高月分女月次
 あつておける
 とちうりや
 途平今戸あ方り
 うらや
 氏と別まむらぬ林
 りや
 色あざあくるきき田の
 すんた
 赤の縹あてきき田の
 退くきき田の



湯島の辺に暮らす
 一住の者ありたり
 久しきに病おこりては
 かくかくはれん
 自由なる世のまある
 りの今の世も
 病おこりたる
 そのまあるに
 病おこりたる



ありては
 病おこりたる
 病おこりたる

病おこりたる
 病おこりたる
 病おこりたる
 病おこりたる

湯島の辺に暮らす
 一住の者ありたり
 久しきに病おこりては
 かくかくはれん
 自由なる世のまある
 りの今の世も
 病おこりたる
 そのまあるに
 病おこりたる



ありては
 病おこりたる
 病おこりたる



○或人然便の
 落士本津氏多
 人本末別男の
 元家ありて
 洲も又いさき
 連合るか今成
 秋の夕あつとや
 岩連より退かへ
 者不いゆるさば人あて
 業もなけまば掃女あつとる
 やと
 家のたしつゆ内ふて麻
 巾のあんとするさう
 藤丸の中より



最凄一
 美形の
 田好怪
 忽抱と
 本津氏
 死かゝるふりの
 とらんまこと身とをのく徳と
 後より 疾く 妖怪のま向目
 づけて 切符さふ
 以形勢ふへさきさくや口

口の妊
 怪の身と
 おどらへ外の方
 うく遊んとするさ
 本津氏遊さば遊さめ
 奇くくは是と生捕
 福とらへさう
 是るふ是年経程あり
 高時奇病の流乃せるその
 虚ふ有込他人とさうさ
 ありむるものことと
 下

○中橋宗倉所なかはしむねくらの中間大英おおいへと
 いる河医かみありとむの
 暴行はつぎやう病やまひの医陣いじんの
 りん控かまへる病人びやうじんとも自己おのれ
 兼利かねり医業いごうとそくを多おほく
 本後ほんごさせりしが
 或敷あるよしを隣となりに流ながすの事
 ありて更さらに振まる事ありと
 疎町そちやうにて家いへかたり森もりまゝん
 としける時とき氣きの如ごとく
 大英おおいへが傍そばに坐まりし事
 阿あの氣きの寄より退ひけ



よと兼かね小揚こやう揮ひ
 せうと兼かねの目めあり
 更さらにおもひを免めん角かくする内うち
 ソレ氣きめち擔かへ入いりいせん
 苦くるし叫こゑが小こ入いりいせん
 ぬまが兼かねも立た立たる事あり
 布ぬのとて袂たもとまとするうち近きん所じよの人ひとも走は走は
 あのまゝ小大英おおいへの最さいりけアレ又また後あとへと
 さう背せへむらうとと懼おそれするうち
 後あとへ入いりて終はつふその後あと息いき絶たけるその火か急いそまることするもわ
 の新あらたひの身みはあつり相あらる違ちがひあるその一ひとつと後あと小揚こやうて万まの年としの
 かゝるやあゝん時の如ごとく小揚こやうつとてとねり



前の大英の派一ふ似て死せざる者由救多ありて療治こと尋ふ其の
 方針あるありし如て是れと捕へ又先と後など一と其方針を責むら如く
 いざ退せし退くば其の如しと又と高きを急げ其の念も有りま
 ず如と突奇き血を吐くやあり或は其の心も苦まらるるを如
 救ト云ふと其ふ其救の事とあり

○時々の戒表

夫ら其田のり場きふく大流産の産安を其の交脚のふ人あり人
 或夕れ分也其後乃のむあるの救食も其の養を其るが救守のいお其

惟や其をると愛と見て其まが愛ありをて其ふ其のせとくも其
 小の年まのいれに林のまのあは其有痛くを其せとく其速の速惑のいを
 うま若痛はのりまを一日痛ても其涙なり其ま其れと心其れに其の
 微其のいやとよまをいれ下も其れに其れに其れに其れに其れに其れに
 さが汝如のし方ふ入て其れ其れと其れ其れと其れ其れと其れ其れと
 幼男女をくく下も其れに其れに其れに其れに其れに其れに其れに
 愈々其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ
 の底のり人きて其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ



白澤三圖

毎夜この鬼と

枕おそへくす

とて山ゆめとて

ゆめゆめと

いづるま

神こちがせ活と

いづるま

ゆくゆめとて

ゆめゆめと

いづるま



于時安政五

戊午季槐九月

天壽堂藏梓

實

